

喜多義勇編

校註
蜻蛉日記

武藏野書院

昭和三十四年四月十五日 印刷
昭和三十四年四月二十日 發行

校註 蜻蛉日記

定價 一五〇円

編者 喜多義勇

発行者 東京都千代田区神田錦町三ノ十一
合名会社 武蔵野書院

代表者 前田武

印刷者 東京都千代田区神田多町二ノ七
株式会社 三美印刷

代表者 山岡景恭

發行所 合名会社 武蔵野書院

東京都千代田区神田錦町三ノ十一

振替口座東京六七一四六番

電話東京(29)四八五九番

喜多義勇編

校註

蜻蛉日記

武蔵野書院刊

凡 例

- 一、底本には、宮内庁書陵部蔵の桂宮本を用い、諸写本・諸家・編者の説を以て校訂した。
- 二、底本の本文を改めた所は、本文の左側に・をつけ、上欄▽の条に原形を記した。
- 三、本文の理解に必要な事項は、本文の右肩に＊をつけ、上欄○の条に記した。
- 四、本文の校訂に諸説のある所は、その参考となるものを、▽や○の条に「…とする説がある」として記した。
- 五、蜻蛉日記には、いつの頃からか、巻末に作者の歌集がついているが、本書ではこれを仮りに「道綱母集」と呼ぶことにした。宮内庁書陵部に「道綱母集」および「傳大納言殿母上集」と名づけた独立の歌集があるので、前者の名を借りたのである。
- 六、本文と引用文（歌）の仮名遣は歴史仮名遣に統一し、他は新仮名遣を用いた。
- 七、本書の用途と日記的叙述に従い、年・月・日の改まる所で、できるだけ行を改め、殊に、年の改まる所は、「天曆八年（九五四年）」のように掲げて、はつきりとさせた。
- 八、本文には適宜漢字をあて、濁点をつけ、句読点を施して、読みやすくした。
- 九、巻末に、国文学全史平安朝編の一章を取めて参考に供した。従つて、蜻蛉日記をはじめ読む場合には、特にここをまず閲読されたい。
- 一〇、巻末に、作者・兼家・道綱の略歴、文献の一覧、略系図を添えた。
- 一一、蜻蛉日記は、まだ確かな本文をもつ写本が発見されないもので、決定的な本文を示すことはできないが、本書の本文は、編者が以前に出した諸著の本文とは相当に異つたものとなり、一歩前進したものとなつたと思う。しかし、なお今後改訂する所があろう。
- 一二、本書は多くの研究者の恩恵によつて成り、また底本については、宮内庁書陵部の御厚意を戴いた。ここに記して感謝の意を捧げる。

昭和三十四年三月

編 者

目次

上	卷	七頁
中	卷	一五頁
下	卷	一五頁
	道綱母集	一七頁
	蜻蛉日記 (國文學全史 平安朝編)	一七頁
	作者(道綱母)略歴	一五頁
	兼家略歴	一五頁
	道綱略歴	一八頁
	蜻蛉日記関係文献略	一八頁
	蜻蛉日記関係系図	一五頁
表	紙 道綱の母の夢想(石山寺縁起、粟田口法眼絵・座主杲守僧正詞書)	
底本挿絵	宮内庁書陵部図書寮蔵(昭三三・一一・二五 許可)	

蜻蛉日記

上巻

序

○「本朝第一美人三人内也」(尊卑分脈)。

▽心—ころ

▽やう—えう。「要」とする説がある。

▽多かる—おほかた

▽たかき—たりき

○兼家二十六才。作家二十才頃か。

▽あはつけ—あのけ。「あふな」とする説がある。

○兼家、天曆五年五月二十三日任兵衛佐(公卿補任)。「かしは木いとをかし。葉もりの神のますらむもいとをかし。兵衛の督佐尉などをいふらむをかし」(枕草子)。

*天曆八年(九五四年)

かくありし時過ぎて、世の中にいとははなく、とにもかくにもつかで、世にふる人ありけり。かたちとても人にも似ず、心魂もあるにもあらで、かうもののやうにもあらであるもことわりと思ひつつ、ただ臥し起き明かし暮らすまに、世の中に多かる古物語のはしなどを見れば、よに多かるそらごとだにあり。人にもあらぬ身の上まで書き日記して、珍らしきさまにもありなむ、天の下の人の品たかきやと問はむためしにもせよかしとおぼゆるも、過ぎにし年月ごろの事もおぼつかなかりければ、さてもありぬべきことなむ多かりける。

さてあはつけかりしすぎごとどものそれはそれとして、^{*かしはど}柏木の木高きわたりより、か

○父倫室。

▽便なき―ひけき

▽いひつる―いひつき

▽騒い―きわひ

▽まで―さて

○風雅、「女につかはしける」。第二句「かひなし」。

▽心―ころ

▽すべく―すへて

○母親。

▽かしこまり―かしこさり

○風雅、「かへし」。

○「無音滝、在ニ米迎院村、其水縫レ崖除下、無ニ触レ石響、因名、分通ニ勝林院、南曰ニ呂溪、北曰ニ律溪、二溪復合流ニ入高野川」(山城志)。

○「されど若ければ、文もをさをさしからず、言葉もいひ知らず、いはむや歌はよまざりければ」(伊勢物語)。

くいはせむと思ふことありけり。例の人は、案内するたより、若しはなま女などしていはすることこそあれ、これは、親とおぼしき人に、たはぶれにもまめやかにほのかしに、便なきことといひつるをも知らず顔に、馬にはひ乗りたる人してうちたたかす。誰などいはするにはおぼつかなからず、騒いだればもてわづらひ、取り入れてもて騒ぐ。見れば紙なども例のやうにもあらず、いたらぬ所なしと聞きふるしたる手も、あらじとおぼゆるまで悪しければいとぞあやしき。ありけることは、

(兼家) 音にのみ聞けば悲しなほととぎすこと語らはむと思ふ心ありとばかりぞある。「いかに、返り事はすべくやある」などさだむるほどに、古代なる人ありて、「なほ」とかしこまりて書かすれば、

語らはむ人なき里にほととぎすかひなかるべき声なふるしそ

これを初めにて、またまたもおすれど、返り事もせざりければ、また、

(兼家) おぼつかな音なき滝の水なれや行くへも知らぬ瀬をぞたづぬる

これを、「いまこれより」といひたれば、痴れたるやうなりや、かくぞある、

(兼家) 人知れず今や今やと待つほどに返り来ぬこそわびしかりけれ

とありければ、例の人「かしこし、をさをさしきやうにもきこえむこそよからめ」とて、さるべき人してあるべきに書かせてやりつ。それをしもまめやかにうち喜びてしげう通はす。

▽を越す——もたす

▽あれば——あれそ、

▽にて——にも

▽きこえぬ——きこひぬ

▽ばかり——ばかり

▽なになり——なるなり

○新千載、「東三条入道摂政消息
して侍りける返り事に」。第四
句「は高き」。

また添へたる文見れば、

(兼家) 浜千鳥跡もなぎさにふみ見ぬはわれを越す波うちや消つらむ

このたびも、例のまめやかなる返り事する人あれば、まぎらはしつ。

またもあり。(兼家) 「まめやかなるやうにてあるも、いと思ふやうなれど、このたび

さへなうは、いと辛うもあるべきかな」など、まめ文のはしに書きて添へたり。

(兼家) いづれとも分かぬ心は添へたれどたびはさきに見ぬ人のがり

とあれど、例のまぎらはしつ。かかればまめなることにて月日は過したる。

秋つ方になりにつけり。添へたる文に、(兼家) 「心さかしらづいたるやうに見えつる憂

さになむ、念じつれど、いかなるにかあらむ、

(兼家) 鹿の音もきこえぬ里に住みながらあやしくあはぬ目をも見るかな

とある返り事、

(作者) 高砂のをのへわたりに住まふともしかさめぬべき目とは聞かぬを

げにあやしのことや」とばかりなむ。

またほどへて、

(兼家) 逢坂の関やなになり近けれど越えわびぬれば歎きてぞふる

返し、

(作者) 越えわぶる逢坂よりも音に聞く勿来を難き関と知らなむ

などいふ。

まめ文通ひ通ひて、いかなる朝あしたにかありけむ、

(兼家) 夕ぐれの流れ来るまを待つほどに涙おほみの川とこそなれ

返し、リコト

▽心—ころ

(作者) 思ふことおほみの川の夕ぐれは心にもあらず泣かれこそすれ

また三日ばかりの朝あしたに、

(兼家) しのめにおきける空は思ほえてあやしく露と消えかへりつる

返し、

(作者) さだめなく消えかへりつる露よりもそら頼めするわれはなになり

かくて、あるやうありて、しばし旅なる所にあるにものして、つとめて、(兼家) 「今

▽のどかにと—のどかに

日だにのどかにと思ひつるを、便ひなげなりつれば。いかにぞ、身には山がくれとのみなむ」とある返り事に、ただ、

▽ける—けり

(作者) 思ほえぬかきほにをれば撫子なでしこの花にぞ露はたまらざりける

などいふほどに九月になりぬ。

つごもり方に、しきりて二夜ふたよばかり見えぬほど、文ばかりある返り事に、

○後拾遺、「入道摂政九月ばかりの事にや、夜がれして侍りけるつとめて、ふみおこせて侍りける返り事につかはしける」。

▽しぐるる—しらるゝ

立ち返り、返り事、

○統拾遺、「右近大將道綱の母のもとより、しぐるる空もわりなくなど申し遣したりける返り事に。」「今朝や時雨と」。万代、「右大將道綱母、しぐるる空もわりなしなどいひて侍りければ。」「後拾遺、「入道摂政夜がれがちになり侍りける頃、くれにはなどいひおこせて侍りければ、いひ遣しける。」「新勅撰、「神無月のついにちに女に遣しける。」

○父倫寧。

○兼家。

▽ごとに―ことは

○兼家。

○倫寧。

○作者。

▽見なき―みなる。「こゝなる」又「かたへなる」とする説がある。

▽心―ころ

▽事―と

(兼家)* 思ひやる心の空になりぬれば今朝はしぐると見ゆるなるらむとて、返り事書きあへぬほどに見えたり。

またほどへて見え怠るほど、雨など降りたる日、「暮くれに來きむ」などやありけむ、

(作者)* 柏木かしはぎの森もりの下草したくさ暮れごとになほたのめとやもるを見る見る

返り事はみづから來てまぎらはしつ。

かくて十月になりぬ。ここに物忌なるほどを、心もとなげにいひつつ、

(兼家)* 歎なげきつつ返す衣の露けきにいとど空さへしぐれ添そふらむ

返し、いとふるめきたり、

(作者)* 思ひあらばひなましものをいかでかは返す衣のたれもぬるらむ

とあるほどに、わが頼たのもしき人陸奥国むつへ出で立ちぬ。

時はいとあはれなるほどなり。人ひとはまだ見馴るといふべきほどにもあらず。見ゆるごと

にたださしめぐるにのみあり。いと心細く悲しきことのみに似ず。見る人ひともいとあは

れに忘るまじきさまにのみ語らふめれど、人の心はそれにしたがふべきかと思へば、

ただひとへに悲しう心細きことをのみ思ふ。今はとて皆出でたつ日になりて、行く人ひとも

せきあへぬまであり。とまる人はたまいていふかたなく悲しきに、「時たがひぬる」とい

ふまでもえ出でやらず、また見なき、硯すずりに文をおし巻きてうち入れて、またほろほろと

うち泣きて出でぬ。しばしは見む心もなし。見出ではてぬるに、ためらひて何事ぞと見

れば、

○後拾遺、「入道摂政若う侍りける

頃、大納言道綱の母にかよひ侍りけるに、みちのくにへまかり下らむとて、見よとおぼしくて女の硯にいて侍りける」。

○後拾遺、「返し」。第二句「いはば」第四句「ちよをも」第五句「きみ」。

▽だに「たち」「こゝち」とする説がある。

○比叡山三塔の一。「十二月五日、(中略)九条右丞相為ニ八講一登山、居ニ曹局ニ(扶桑略記)。

▽ぬる人―ぬる人

○兼家二十七才。道綱生れる。

(倫寧)^{*}君をのみたのむ旅なる心には行く末遠く思ほゆるかなとぞある。見るべき人見よとなめりとさへ思ふに、いみじう悲しうて、ありつるやうに置きて、とばかりあるほどにものしためり。目も見合せず思ひ入りてあれば、(兼家)「な

どか、世の常の事にこそあれ。いとかうしもあるは、われを頼まぬなめり」などもあへしらひ、硯なる文を見つけて、(兼家)「あはれ」といひて、門出のところに、

(兼家)^{*}われをのみたのむといへば行く末の松のちぎりもきてこそは見めとなむ。

かくて日のふるままに、旅の空を思ひやるだにいとあはれなるに、人の心もいと頼もしげには見えなむよがありける。

師走しはすになりぬ。^{*}横川よがにものすることありて登りぬる人、(兼家)「雪に降りこめられて、いとあはれに恋しきこと多くなむ」とあるにつけて、

(作者)氷るらむ横川の水に降る雪もわがごと消えてものは思はじなどいひて、その年はかなく暮れぬ。

天曆九年(九五五年)^{*}

正月ばかりに、二三日見えぬほどに、ものへ渡らむとて、(作者)「人來こば取らせよ」

とて書き置きたる、

(作者) 知られねば身をうぐひすのふり出でつつなきてこそ行け野にも山にも

返り事あり、

(兼家) 鶯のあだにて行かむ山辺にもなく声聞かばたづぬばかりぞ

などいふうちより、なほもあらぬことありて、春夏なやみくらして、八月つごもりにと
かうものしつ。そのほどの心ばへはしもねんごろなるやうなりけり。

さて九月ばかりになりて、出でにたるほどに、箱のあるを、手まさぐりにあけて見れば、人のもとにやらむとしける文あり。あさましさに、見てけりとだに知られむと思ひて、書きつく。

(作者) *わつらはしども うたがはしほかにわたせる文見ればこわれこそこやとだえにならむとすらむ

○拾遺、「入道摂政まかりかよひける時、女のもとに遣しける文を見侍りて」第四句「われや」。

○「むべなう」とする説がある。

▽がる―かたる

▽得―を

○西洞院と室町との間の小路を町という(拾芥抄)。

▽ぬる―ぬ

▽ある―あり

▽門を―門も

になむとまり給ひぬる」とて来たり。さればよといみじう心憂しと思へども、いはむやうも知らであるほどに、二三日ばかりありて、曉方に門をたたく時あり。さなめりと思ふに、憂くてあけさせねば、例の家とおぼしき所にものしたり。つとめて、なほもあらじと思ひて、

○拾遺、「入道摂政まかりたりけるに、門をおそく開ければ、たちわづらひぬといひ入れて侍りければ」。

▽事を

○大鏡参照。

▽戸も—戸に

▽わびし—わるし

○兼家二十八才。道綱二才。

○作者の姉に通う人、為雅。

長良—〇—〇—文範—

藏正四下
式備中守
為雅

母 伊勢守 正茂女

▽折りて—おもて

▽枝—み

○「漢武内伝云、西王母桃、三千年一生レ実」(和名抄)。

▽見つべき—みつゝき

▽一方—ひとよた

(作者)* 歎きつつひとりぬる夜のある間は^{*}いかに久しきものとかは知ると、例よりはひきつくるひて書きて、うつろひたる菊にさしたり。返り事、(兼家)「明くるまでも試みむとしつれど、とみなる召使の来あひたりつればなむ、いとことわりなりつるは、

(兼家)* げにやげに冬の夜ならぬまきの戸もおそくあるはわびしかりけり
さてもいとあやしかりつるほどに、ことなしびたる。しばしは、忍びたるさまに、「内に」などいひつつぞあるべきを、いとどしう心づきなく思ふことぞ限りなきや。

* 天曆十年 (九五六年)

年かへりて、三月ばかりにもなりぬ。桃の花などやとり設けたりけむ、待つに見えず。^{*}今^{ひとかた}一方も、例は立ち去らぬ心地に、今日ぞ見えぬ。さて四日のつとめてぞ皆見えたる。夜べより待ち暮したる者ども、「なほあるよりは」とて、こなたかなた取り出でたり。志ありし花を折りて、内の方よりあるを見れば、心ただにしもあらで、手習ひにしたり。

(作者) 待つほどの昨日過ぎにし花の枝は^え今日折ることぞかひなかりける

と書きて、よしや憎きにと思ひてかくしつる気色を見て、奪^はひ取りて返ししたり。

(兼家)* 三千年^{みちとせ}を見つべき身には年ごとにすくにもあらぬ花と知らせむ

とあるを、今^{ひとかた}一方にも聞きて、

▽もとつ人―本はひと。「本は」を脱文の注記とする説がある。

▽心―ころ

▽も―て

○作者自身。

▽かるる―かゝる

○為雅

▽そへて―そひて

▽おほかた―おほひに

○時姫。藤原仲正の女。この当時は道隆（天曆七年生）がいた。

▽かる―よる

（為雅）花によりすくてふことのゆゆしきによそながらにて暮してしなり

かくて、今はこの町の小路に、わざと色に出でにたり。もとつ人をだにあやしくやしと思ひげなる時がちなり。いふかたなう心憂しと思へども、なにわざをかはせむ。

この今一方^{ひなた}の出で入りするを見つつあるに、今は心安かるべき所へとて率^{すゑ}て渡す。とまる人まして心細し。影も見えがたかべいことなど、まめやかに悲しうなりて、車寄するほどに、かくいひやる。

（作者）などかかる歎きはしげさまさりつつ人のみかるる宿となるらむ

返り事^{＊をこ}は男ぞしたる。

（為雅）思ふてふわが言の葉をあだ人のしげる歎きにそへて恨むな

などいひ置きて皆渡りぬ。

思ひしもしるくただ一人臥し起きす。おほかたの世のうち合はぬことはなければ、た

だ人の心の思はずなるを、われのみならず、年頃[＊]の所にも絶えにたなりと聞きて、文など通ふことありければ、五月三四日のほどにかくいひやる。

（作者）そこにさへかるといふなる真菰草^{＊こもぎ}いかなる沢に根をとどむらむ

返し、

（時姫）真菰草かるとは淀の沢なれや根をとどむてふ沢はそことか

六月になりぬ。朔日^{ついでち}かけて長雨いたうす。見出して、独り言に、